



上智大学創立 100 周年
上智短期大学創立 40 周年
上智社会福祉専門学校 50 周年



演劇と語劇

No. 29

演劇

1. イエズス会と学校演劇

かつての上智大学では、事あるごとに教員と学生と一緒に歌を歌ったり、演劇、特に語劇を上演する習慣があった。学生寮でもよく歌われていたし、寸劇なども行われていた。これには理由がある。イエズス会が

運営する学校では、古典文学のほかに、自己表現の手段として演劇活動が重視されていた。この根底にはイエズス会の基本的な考え方がある。創設者イグナチウス・デ・ロヨラは、神の恩寵と人間の自由意志、個人の独立と権威あるものへの



創部の頃の演劇研究会(1932年)

従順などの相対立するものの中であって、人間の人格的な調和を目指した。イエズス会の

演劇活動も、こうした意図から生まれたものである。ヨーロッパではシチリア島のメッシーナのマメルティノ学院で 1551 年に始まったといわれているが、またたく間に全ヨーロッパにも広がり、ラテン語だけでなく、ドイツ語やフランス語などそれぞれの地域の言葉を取り入れた劇を作ったのが、イエズス会演劇の特徴である。すでに日本でも 1560 年に聖書の記述をテーマにした劇が府内（大分）で上演されている。1562 年には平戸で降誕祭劇が、1563 年にも度島（たくしま）で天地創造、アダムの墮落、ノアとアブラハムの物語を題材とした劇が行われていた、との記録がある。こうした演劇活動を通して聖書の物語やキリスト教ヒューマニズムの精神が広く理解されることを狙いとした。

2. 上智大学での演劇活動

戦前に上智大学で活発に活動していた課外活動団体は、「演劇研究会」であった。演劇研究会の歴史は古い。1931 年に「演劇および演劇学の研究」を目的に創設された。この会は演出部、演技部、舞台美術部、音響効果部、文芸部の 5 つに分かれ、各部に部長・副部長を置いた。そしてユニークなのは、1949 年からは「演劇実験室」を作り、ひ



戦前の演劇活動、菊池寛作「順番」(1935年11月1日上演)

とつのテーマを基に 5 つの部が横断的なグループを構成し、小道具、照明、脚本、会員の劇創作、演出の方法など、トータルに演劇を学ぶことを目的としたことである。また、文芸部が主催する「戯曲研究会」もあり、テキストの回読、討論などを行っていた。

上智大学がカトリック系大学だからといって、演劇は必ずしも宗教的なものや、倫理的なものだけが演じられたわけではない。その意味では宗教に基礎をもたない大学の演劇活動と同じである。内外の古典劇、現代劇なども演じられてきた。戦争中に上智大学の講堂で、ゲーテの

「ファウスト」を観て感激したという卒業生や一般の人も多い。

戦時中は一時中断していたが、戦後まもなく1946年6月に、演劇研究会は、岸田国士作「取引にあらず」を上演した。そして、その年11月の最初の大学祭で第1回定期公演が催された。それがハウプトマン作の「ハンネレの昇天」であった。その詳細が「上智大学新聞」に紹介されている。その後は、現在まで国内外のよく知られた劇作家の作品を上演し続けてきた。

ちなみに戦後初期の頃に上演された劇作家と作品名を挙げておくと、①アントン・チェホフ／



1956年頃の演劇活動

結婚の申し込み ②三好十郎／稲葉小僧 ③ポール・クローデル／マリアへのお告げ ④岸田国士／可児君の面会日 ⑤ホフマンシュタール／イエーダーマン ⑥ホイヴェルス／聖フランシスコ・ザビエルの来朝 ⑦久保田万太郎／浅芽生 ⑧木下順二／彦一話 ⑨ソポクレス／オイディプース ⑩福田恒存／最後の切り札 ⑪椎名麟三／家主の上京 ⑫ジャン・コクトー／オルフェ ⑬T・S・エリオット／寺院の殺人 ⑭三島由紀夫／薔薇と海賊 ⑮S・ベケット／ゴドーを待ちながら、などなどである。



1957年のソフィア祭での演技

3. 1号館講堂（通称「上智小劇場」）

演劇の上演は主に1号館講堂で行われていたが、この講堂が学生の演劇専用の施設として使われ始めたのは、1971年であった。その年に演劇好きの英語学科教授ドナルド・メイスン神父が、「学生が自由に使える小劇場を作る」という目的で、演劇協議会や英語劇サークル（SETS）の学生たちとペンキや大工道具を手に、講堂を劇場に改造してしまったのである。周囲の白壁をペンキで真っ黒に塗ってしまったときは、さすがに大学の関係者もびっくりしたらしい。

一時期、この劇場は学外にも有名になり、野田秀樹が「夢の遊民社」の公演を行った。また、イギリスの名門ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーが「ヘンリー5世」を上演し、大女優ジュディ・デンチも舞台に立ったことがある、と英語学科東郷公德教授は回想している。さらにこの劇場に現皇太子さまが観劇に訪れたこともある。学生たちは、現在も、この1号館講堂を通称「上智小劇場」と呼んで、演劇や語劇活動の拠点として使用している。



1号館講堂での活動風景(2010年)

語劇

1. 教育活動としての語劇

上智大学では、創立当初から、語劇いわゆる外国語での演劇活動が行われていた。その理由は、言語や文学を学ぶのに演劇活動がもっとも適していると、考えられたからである。「学生は外国人教授の下に外国語の発音、イントネーション、間の置き方、ジェスチャーを含めた感情表現を正しく覚えることができた」と、『上智大学史資料集第二集』に述べられている。すなわち、語劇は全身全霊の表現活動で言葉を体得するというものであった。その背景には、イエズス会の青少年教育のための演劇活動重視の伝統があった。



上智大学創設者の一人であるアンリ・ブシェー神父の日記に、1915年2月19日に赤レンガ校舎の講堂で、ドイツ語劇が上演された、との記述がある。そのとき何が上演されたのかは不明だが、大学創立当初からこうした語学教育のための語劇が行われていたことがわかる。1921年11月3日と4日には、芝居好きのヴィクトル・ゲッテルマン神父の演出によって、シラーの「ヴァレンシュタイン」が上演された。当然のこと、演者は学生で、予科においてドイツ語を懸命に勉強し、本科に進学した1年生であった。演者のリストには Y. TANEICHI、K. SAKURAI などの名前が見える。最初の頃はドイツ語劇や英語劇が上演されていた。ドイツ語劇では、シラーの「ウィルヘルム・テル」、ハンス・ザックスの「パラダイスから来た学生」、また演劇に精通しているホイヴェルス神父がグリム童話から脚色したものが上演されていた。英語劇では、ディケンズの「クリスマス・キャロル」なども上演されていた。



1959年11月2日第46回ソフィア祭でのスペイン語歌劇

2. 語劇祭へと発展する

戦前に行われていた語劇は、戦中期には中断していたが、戦後になってからソフィア祭などで上演され、徐々に復活の兆しが見えてき始めた。そのため、1960年に各語劇団体を一堂に集めて「語劇祭」としての公演を行った。当時は英語劇、ドイツ語劇、スペイン語劇、フランス語劇、ロシア語劇、ポルトガル語劇が行われていた。英語劇が1970年に語劇祭から独立し、ポルトガル語劇が1972年で活動を停止したため、その後は他の4語劇団体で、毎年語劇祭を開催し、意欲的な活動を行ってきた。

語劇の重要性について、第1回の語劇祭の委員長を務めた金子有一氏は、次のように語っている。

「語学を勉強するというこの下手な我々日本人ですが、ただ単に英語やドイツ語を書いたり、読んだり、通訳の練習をしたり……それだけで果たして外国の人を知ることができるのでしょうか。風俗や習慣、強いては外国人の持つ感情まで知ることができるのでしょうか。むろん劇でも台本を暗記し、舞台上でそれを喋るだけでは何の意味もありません。しかし、日常授業で覚えた語学を生かし、舞台の上で外国人になりきって芝居を演ずることができるならば、



ブレヒト作「三文オペラ」の舞台公演(1977年11月)

……スタッフ、キャスト一体となつての努力が回を重ねるごとに、それを次第次第に可能ならしめたものだと思います。」

台詞がわからない学生にとっては、関心が低かったり高かったりと悲喜こもごもであり、しかも演出も難しく、練習でも発音に多くの時間を費やすなど問題点はあったが、演じる学生にとって外国語を覚えることの基本的な考え方がここに示されている。「語学の上智」といわれるようになってきた一つの姿が、「語劇」にある。

1960年の第1回から1971年の第12回までは、赤坂の砂防会館で行われた。その後、1号館講堂へ場所を移し、春には新人公演、秋には本格的な語劇祭が行われてきた。当時は、ドイツ語劇、スペイン語劇、フランス語劇、ロシア語劇が中心であったが、2006年からドイツ語劇が中断、フランス語劇も2004年から中断している。2011年現在では、スペイン語劇、ロシア語劇、復活したポルトガル語劇が行われている。



1967年のソフィア祭でのフランス語劇

3. これまで活躍してきた主な語劇団体

○ドイツ語劇

ドイツ語劇は大学創立当初から行われており、1950年からはドイツ・リンク（ドイツ文化を総合的に研究する会）によって上演していたが、1973年に「独語劇実行委員会」として新たに発足し、1976年から「グルッペ '76」、87年に「ドイツ語劇団グルッペ」と改名し、1994年から「ドイツ語劇団」となった。

ドイツの最も偉大な劇作家ブレヒトを始めとして、ゲーテ、クライスト、ホフマンスタール、レッシングなど著名な作家の作品を上演している。演劇改革を行ったペーター＝ハントケの「カスパー」を取り上げたり、1987年にはヘルマン・シュルツ作「ここにも風は戻って」という作品では、幻想的な舞台づくりと日本語を交えるなどの試みを行って高い評価を得た。

○スペイン語劇

1955年の文学部イスパニア語専攻だったときから、サルスエラー（一種の軽喜劇）などを上演していた。1960年の語劇祭には、スペイン文化研究会やイスパニア語学科が、アルニチェスの「子犬」を上演した。その後、一時中断の時期もあったが、新たに1977年に「スペイン演劇研究会」として発足し、ビクトール・ルイス・イリアルテやアントニオ・ブエロ・バジエホなどスペインを代表する劇作家の作品を取り上げている。

○フランス語劇

最初はフランス語学科とフランス文化研究会によって活動が行われていたが、1971年に「仏語・仏文語劇実行委員会」となった。その後、「仏語劇実行委員会」「フランス演劇研究会」などと名称を変更し、1979年からはフランス文学科の学生が中心となる「仏語劇団」となった。フランスでは著名な劇作家が多く、モリエールやサン＝テグジュペリ、ジャン・アヌイ、サルトルなどの作品を取り上げている。

○ロシア語劇

1960年に「ロシアソビエト研究会」が主体となって行われていたが、学生主体の「ロシア語劇」サークルとなり、1979年には「ロシア語劇研究会」と一時名称を変えたが、再度「ロシア語劇」となり、ゴーリキーやチェーホフの作品を数多く上演している。このロシア語劇から、2000年に劇団「アニュータ」が、学外の上演や創作劇を目指して枝分かれした。

